

# 独庵玄光師の特異性

大 谷 哲 夫

独庵玄光（一六三〇—一六九八）師は連山師と共に洞門における因院易嗣の革弊を早くから主張し、その主張は元禄十一年（一六九八）二月十一日六十九歳の生涯を閉じた後、所謂の宗統復古運動の主流となつた梅峯・卍山兩師を中心とする革弊運動遂行の原動力となつたことは周知されている。

ところが、その革弊運動が幕府側の政治的配慮と相俟つて成立して以後、宝永年間（一七〇四—一七一〇）に至ると俄に独庵師に対する批判が見出される。

損翁師は『損翁老人見聞宝永記』によれば、独庵師を次のように誹謗している。

玄光未<sub>レ</sub>及<sub>三</sub>永覚之識量<sub>二</sub>。（中略）但以<sub>三</sub>聯明<sub>二</sub>向<sub>三</sub>冊子上<sub>一</sub>、自模<sub>三</sub>素仏祖之蹤跡<sub>二</sub>。以<sub>レ</sub>故護法集中涉<sub>三</sub>僻說<sub>二</sub>頗多。具眼者可<sub>三</sub>看破<sub>二</sub>而已。

こうした損翁師の独庵師に対する批難は、宗旨という面から後に卍山師系の宗学が正統視される時点で、独庵師が天桂師と共に宗門において異端視される問題を含めて曹洞禪復古思想史上の問題として論じられなければならないが、今は単に

独庵玄光師の特異性（大 谷）

損翁師の「未及永覚之識量」と批難し、「護法集中、涉僻說頗多」と誹謗しているところにのみ注視し、その批難誹謗の根元的な理由の一端を、独庵師の『護法集』十六巻を初めとする多数の著作の過半を特徴づけている儒仏二教にわたる議論をその背景として瞥見するに止めておきたい。

今ここでは、その時代の思想背景を包含して独庵師の儒仏論を詳述する紙面を持たぬが、師の議論の特色は単に儒仏の一致を論ずる（岡田師はその著『日本禅籍史論』において独庵師は儒仏一致論を唱えたとするが）のではなくして、あくまでも儒と仏とを並列的にみているところにある。

例えば、師は儒と仏とを判然と區別して、

凡<sub>レ</sub>儒仏之先徳、各取其書之言之彷彿<sub>二</sub>儒仏<sub>一</sub>、而<sub>一</sub>致於<sub>二</sub>二教<sub>一</sub>、而息其徒之爭。其心非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>美。而<sub>二</sub>二教皆明<sub>三</sub>明理<sub>二</sub>。儒不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>仏而行。仏何必合<sub>レ</sub>儒而後行。

と明言し、さらに儒と仏との厳然たる差異は、前者が入世で後者が出世であるとするところに察せられるように、そこに

は思想と宗教という根本的な相違があることを示唆し、其語雖似其義非也。今因<sub>レ</sub>彷彿依傍之一二言、而解<sub>レ</sub>儒書、同<sub>レ</sub>仏義釈<sub>レ</sub>仏經、而混<sub>レ</sub>儒文。豈<sub>レ</sub>儒典之義乎。豈<sub>レ</sub>仏教之義乎。

とも云つている。また、儒者の仏教に対する批判についても、程子の問題に触れて、

偶見<sub>レ</sub>己之不学而已。程子以<sub>レ</sub>文害<sub>レ</sub>義、則雖六經不可<sub>レ</sub>解。と極論し、さらには儒仏混同の原因について、

大凡解<sub>レ</sub>仏教儒典<sub>レ</sub>者、解<sub>レ</sub>其所<sub>レ</sub>知而於其所<sub>レ</sub>不知則闕焉可也。以<sub>レ</sub>己<sub>レ</sub>之見聞<sub>レ</sub>限、達<sub>レ</sub>文義難<sub>レ</sub>解、則或以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>脱簡、或以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>舛誤。敢<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>塗注<sub>レ</sub>疵類彙章、改<sub>レ</sub>易句字、疑<sub>レ</sub>誤後学。

と云つてはいるが、独庵師はその禅的立場から儒教を批難排斥せず、飽くまでも儒と仏とを並列してみている。

『護法集』中には、こうした儒仏論が散見されるが、就中の序に「拠<sub>レ</sub>儒議釈」とみられるように、ここでは明確に格義的方法として儒典によつて仏教を解する一方法が示されている。さらに云えば、廓門師が『護法集』の出典考証した『独庵護法集碎金』によれば、廓門師が『護法集』の出典考証した『独庵護法集碎金』によれば、その考証出典の殆どが外典であるところにも独庵師の著作の傾向の証左をうることができるのであるが、こうした儒教的な背景をもつ思考傾向が、損翁師がまず第一に「護法集中涉僻說頗多」と誹謗した根拠の一端となつていないかと考えられる。

それでは、独庵師は何故に儒仏二教を厳然と区別しながらも、それを並列視し「拠<sub>レ</sub>儒議釈」という時点において儒教を容認しているのであるうか。このような思考法に重大な影響を与えたのは、損翁師が「未<sub>レ</sub>及永覚之識量」と批難するまでもなく、永覚禪師・鼓山元賢師の影響をその背景に考えないわけにはいかない。独庵師は『鼓山晚録』に注を施し、さらには永覚師の『寤言』『続寤言』を校正上梓し

永覚大師所<sub>レ</sub>著寤言統寤言者、到<sub>レ</sub>彼岸之宝椀。達<sub>レ</sub>三宝所<sub>レ</sub>之良導。と讚美し、それを「儒仏の眼目、經論の肝心」なりと讚辞をおし、その上梓の経緯を、

独所<sub>レ</sub>恨者、此土市販所<sub>レ</sub>流布之本、有<sub>レ</sub>誤字有<sub>レ</sub>脱字、未<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>全本。猶如<sub>レ</sub>人身被<sub>レ</sub>創夷而未<sub>レ</sub>療也。予為<sub>レ</sub>之不安。普探<sub>レ</sub>書肆、購<sub>レ</sub>得大師之真子鼓山為霖禪師所<sub>レ</sub>刻支那刻本。（中略）

と述べているところにそれを知りうるからである。この『寤言』『続寤言』は独庵師も云うように、永覚師が儒仏の眼目、經論の肝心を論述したものであるが、その意図するところは、当時の儒禪一致論の弊害への弾劾である。したがつて独庵師の上梓もまた当時の日本における『儒仏或問』あるいは『儒仏合論』等々において議論されているそうした思想傾向に対する批判を込めたものであることは推察に難くない。

ところで、当時の禅界への永覚師の影響は看過すべからざるものがあつたのは事実であり、独庵師がその最たる一人で

あつたことは、「題鼓山永覚禪師画像贊」にもよく窺えるが、『護法集』に永覚師の唯一の法嗣である為霖道霽師の序が寄せられていることが何よりもよく独庵師の永覚師への傾倒・思慕の念を現わしていると言えよう。それは宗祖道元禪師に對するそれよりも大きな比重を占めていたようである。

こうした理由の一端は、「書叢林葉樹後」によれば、『広録』を偽書とみ、『眼藏』については、

独庵一生片言、不<sub>レ</sub>涉<sub>二</sub>彼書<sub>一</sub>(眼藏)、有<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>之者、則曰、我不知、我不知、未<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>彼書<sub>一</sub>。

と云つたと伝えられるところによれば、独庵師は『眼藏』の存在を容認していなかつたようであり、その間の事情を、

其如<sub>二</sub>独庵<sub>一</sub>、雖異道百家之書、無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>誑。則豈又可<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>我家之古書<sub>一</sub>哉。

夫如<sub>二</sub>独庵<sub>一</sub>氣勢激烈、護法之志老益々壯。是非辨別無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>至。則豈敢措<sub>二</sub>彼書<sub>一</sub>(眼藏)哉。不<sub>レ</sub>措也必矣。

と伝えられているところによると、彼の博覧強記なる独庵師にとつてさえも『眼藏』は当時全くの室中本としての秘本でしかなかつたことが知られ、独庵師にとつては宗祖としての道元禪師が極めて不鮮明な存在であつたことに起因しているのではないかと思われる。したがつて、独庵師の時代には、

而今其兩派之不<sub>二</sub>相容<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>水火之不<sub>二</sub>同<sub>レ</sub>器<sub>一</sub>。  
とかあるいは、

独庵玄光師の特異性(大谷)

今日日域洞濟兩派之徒各榜<sub>二</sub>權所長<sub>一</sub>更相毀辱。

と述べているように、洞濟二家の対立が存したが、独庵師は自らのよる曹洞禪的立場から臨濟禪を対立視するどころか、兩禪を「曹谿之胤」とか「曹谿之一源」とみて、それを融合視さえしているところが窺えるのであるが、こうした思考の一端は、その儒教的教義を背景とする思想と相俟つて、宗派的偏見に取らわれない、当時としては有数な禪者としての資格ではあつたのかもしれないが、宗統復古以後、『眼藏』をその宗学の基盤とする宗門人にとつては、独庵師の思想は極めて特異なものと映らざるを得なかつたのではないかと思われる。したがつて、損翁師の独庵師に對する批難誹謗というのは、はからずも宗統復古直後の宗門的立場からみた独庵師の特異性というものを明確に示唆していると云えよう。

だがしかし、その示寂にあつて、卍山師は「隻手ヲ失フガゴトク」嘆かれたと伝えられるように、当時にあつては宗門的にも知見広大な一代の偉大なる竜象であつたことには相違ないのであり、また宗統復古以後の所謂宗学復興期に与えた影響は、異端とされる天桂師と共に計り知れぬものがある。と同時に独庵師の宗門的に排斥される思想の特異性は洞門という枠を超えて、かえつて当時の儒仏一致説あるいはそれへの対論という日本思想史の範疇の上からは極めて比重の大きい存在であると云つても過言ではないと思われる。(註略)